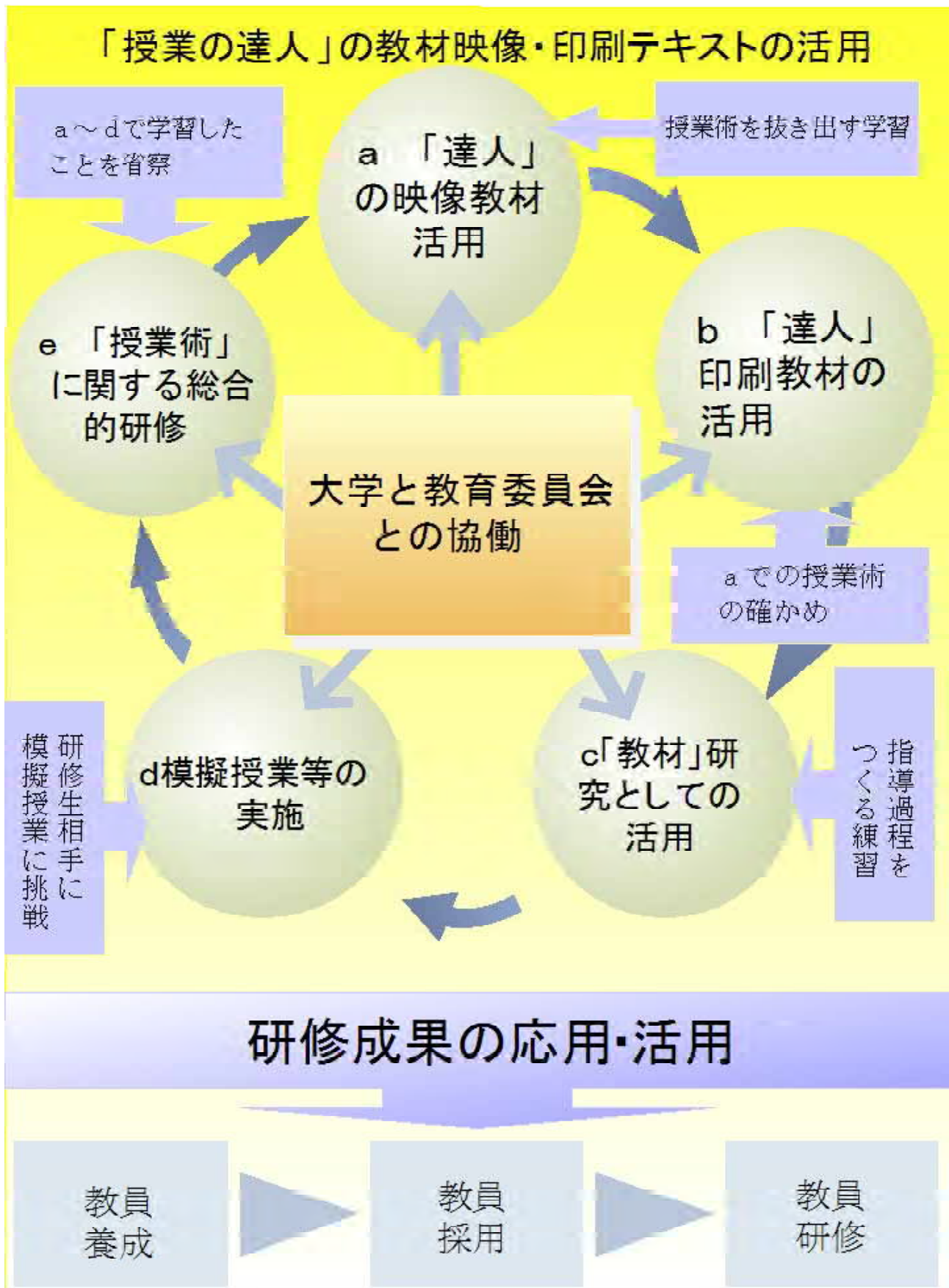


(独立行政法人教員研修センター委嘱事業)
教員研修モデルカリキュラム開発プログラム
(平成20年度 年次研修)
報告書

プログラム名	「授業の達人」の授業分析をもとにした授業力向上モデルカリキュラムの開発
プログラムの特徴	いわゆる「団塊」世代の先輩教員たちが学び、蓄積してきた授業に関する技能や知識を次世代教員に受け渡していくために、本プログラムでは先輩教員の授業に関する技能や知識を分析し、優れた授業を支える授業技術の要素を析出し、それを教員研修や教員養成の場で活用することが可能な映像と文字テキスト教材として開発し、全国に普及する試みである。

平成21年3月31日

十文字学園女子大学 埼玉県新座市教育委員会



開発の目的・方法・組織

1. 開発目的

たつじん [達人] 豊富な経験と長年の鍛錬により、その道の真髓を体得した人。「」の境地に入る」「剣道の」(三省堂『大辞林』第二版)

どんな世界にも達人がいる。当然、学校の世界には「授業の達人」がいる。もしかしたら「いた」と過去形で言わなければいけなくなるかもしれないほど今や少数になってしまっているが、確実に存在している。でも日本の学校、特に小学校の世界ではこの授業の達人こそが学校を支え、そして後輩教師たちを育ててきたのである。それが日本の小学校のよき伝統であり、学校という職場が若い教師たちにとって勉強の場、修練の場となっていたのである。そこで育った教師たちがさらに後輩を育てる役目を果たしていく、こういう伝統、よき循環は昭和時代の末頃までは確実に続いていた。その好循環が今や絶滅の危機に瀕している。

なぜそうなったのか、原因は多種多様であるが、確実に言えることは日本中が、日本の中のあるもこれもがそうなったのであり、学校だけのことではないということである。農業から「篤農」が、手仕事の世界から「職人」が消えつつあるのと同じ軌道である。それで日本の社会はよくなったのだろうか、否である。農業は壊滅状態、食糧自給体制の再構築が叫ばれるようになっている。学校教育では国際学力調査の結果に右往左往する惨状である。

教育学者たちは授業は技術ではない、学問の裏打ちこそ大事だと主張し続けている。そして教育課程の改革こそが危機脱出の鍵だと唱え続ける。実はその度ごとに教室が荒廃し、学力低下が止まらない現実には目を向けようとはしない。教員の養成と研修も基本的にこの流れにすっぽりとはまってしまっている。だから若い世代の教師たちはすぐれた授業者の実際の授業を自分の目でみる機会も無いまま日々を送っている。やがて教師の仕事なんてこんなものかと高をくくることになる。

子どもと接し、子どもを育てるのは教育課程でも、教材でもない。教師そのものである。教師が自分の授業技術を磨き、子どもたちにとって魅力のある授業を展開できないで、学力向上などありえないのである。今や“絶滅危惧種”となりつつある「授業の達人」から学ぶ道を私たちは提示したい。そして達人こそが本当は教育課程を、教材を真に学んでいる存在であることも示したい。

2. 開発の方法

授業の達人の選出

埼玉県新座市教育委員会の協力により、市内学校教員から 2 名の教師を選出した。選出の視点は教材解釈力と授業展開の技術に優れたものという二つである。

研修教材の作成

言葉によっては表現しがたい教師（上記の 2 名）の授業技術を映像により記録するという方法をとった。また、その映像を研修の場において活用するためのテキストを開発し、映像資料と文字テキストを併用することで、優れた教師の授業力をさまざまな場面において学習することが可能である。

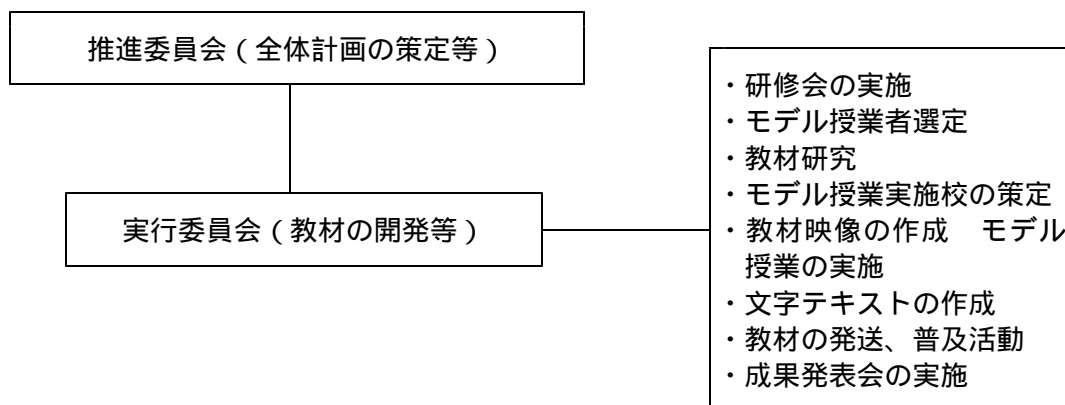
教材の選択と教材解釈

使用した教材は、平成 20 年度小学校 1 年生国語の教科用図書下巻 光村図書出版(株) に掲載されたもの（まどみちお作「ともだち」）であり、どの学校でもすぐに教材研究をすることが可能である。日本語の文章としてみても短いものであり、国語 というように教科目として発想しなくとも、あらゆる教科目・領域等において共通する授業技術であると考えることが可能なように構成した。解釈の詳細は、印刷教材（各都道府県・中核市・政令市教育センター及び、各都道府県所在の教員養成系国立大学等に配布済み）を参照していただきたい。

教材（映像・テキスト）の普及

授業映像は 1 単位時間（小学校における通例の 45 分授業）を 30 分に短縮し、あらゆる研修の場で活用できるよう配慮した。また、教材映像（DVD）とテキスト（冊子体）は、国立大学法人教員養成系大学等図書館及び、都道府県、政令市、中核市教育センターに配布し、全国の大学、教委、学校等で活用できるよう配慮した。

3. 開発組織



十文字学園女子大学・新座市教育委員会 平成 20 年度教員研修モデルカリキュラム開発プログラム推進委員会（平成 21 年 3 月 31 日現在）

横須賀	薫	推進委員長	十文字学園女子大学特任教授
増田	吉史	推進委員・実行委員	十文字学園女子大学教授
井口	磯夫	推進委員	十文字学園女子大学教授
黒瀬	任通	推進委員	十文字学園女子大学教授
狩野	浩二	推進委員・実行委員	十文字学園女子大学准教授
金子	廣志	推進副委員長	新座市教育委員会教育長
三好	節	推進委員	新座市教育委員会学校教育部長
森田	和憲	推進委員	新座市教育委員会学校教育部次長兼学務課長
齋藤	文男	推進委員	新座市教育委員会指導課長
塚田	昭一	推進委員・実行委員	新座市教育委員会指導主事
坂口	智	推進委員・実行委員	新座市教育委員会指導主事
原	克己	推進事務局	十文字学園女子大学事務局長
高畑	滋世	推進事務局	十文字学園女子大学総務部長
笠木	貴和子	推進事務局	十文字学園女子大学総務課長

・開発の実際とその成果

1. 開発したDVD映像をもとに作成した授業展開を支える要素について

各教育センター等に配布した教材は、映像教材（DVD30分）と印刷教材（A4判、全48頁）とで構成されている。映像や印刷教材の経過時間は、実際に行われた授業（45分）のものではなく、編集後のDVD映像のものである。DVD映像では、子どもたちが音読の練習をする場面、子どもたちが発表をする場面、に限り一部を省略してある。したがって、DVD映像の再生時間と、実際の授業時間は途中からずれていくことになるので、実際の時間経過を確認する場合には、DVD映像に途中で示している時間経過と、この授業記録に示した「分経過のテロップ」を参照することが必要である。

授業記録は、DVDの映像をもとに作成し、印刷教材に納めた。いわゆる逐語記録であり、教師や子どもたちの発言を忠実に再現したものである。教育実践記録とは異なり、DVD映像と併せることで授業記録として完成するものである。

子どもの集中した学習活動を成立させる要素を「授業技術の要素」として整理し、印刷教材に収録した。本事業の推進委員会を中心に作成したものであり、さまざまな研修会で活用されることにより、さらに改訂していくことが必要である。活用前の相談を含めて、DVDやこの資料に関して、ご意見をいただければ幸いである。なお、DVDとテキストは、各都道府県所在の国立大学法人（教員養成大学、学部）図書館と各都道府県、中核市、政令市教育センターに配布してあるので、活用される場合にはそこを利用いただきたい。また、そうした場所での利用が難しい場合には、事務局（十文字学園女子大学）まで、ご相談いただきたい。

【事務局】

十文字学園女子大学

平成20年度教員研修モデルカリキュラム開発プログラム推進事務局

〒352-8510 埼玉県新座市菅沢2-1-28

電話 048-477-0555（代表）

FAX048-478-9367（代表）

E-mail:shomu jumonji-u.ac.jp（送信の際には、を@に変更してください）

使用した教材は以下の通りである。使用する場合には、以下の教科用図書を参照していただきたい。

光村図書出版発行

小学校一年生「国語」教科用図書（平成20年度）下巻（1ページ）

まど みちお作「ともだち」

2. 教員研修における活用方法

「授業」を核にした教員研修の工夫

教員研修では、各教科、領域ごとの研修のほか、テーマ別の研修、実務的経験を積む研修などさまざまに取り組みられているが、本事業で開発した教材は、必ずしも特定の教科や領域、テーマに沿ってつくったものではなく、「授業」を核とする研修教材である。したがって、たとえば特別活動、教育相談などにおいて活用することが可能であり、校種を問わず活用することが可能である。

映像教材から読み取る教師の授業術

DVD 映像に収められた授業は、まったく初対面の子もたちに、初めて授業をしたものである。打ち合わせのために、撮影場所となった学校を訪ねた際にも、授業者は子どもたちと会わないようにしたのである。それは、一単位時間の授業の中で子どもと出会い、その子どもたちの気持ちをほぐしながら学習活動を創造する展開をより新鮮に記録するためである。したがって、授業の最初と最後とでは、子どもの表情や体の動きがまったく異なっているのである。この映像を教材とし、どのようなことが読み取れるのか、さまざまな活用が期待される。たとえば、授業における教師の動きはどのようなものなのか、なぜ教師は、映像の中で立つ位置を変えているのか、授業における教師の表情はどのようなものなのか、授業における教師の言葉遣いは、どのようなもので、声の質や方向性など、どうなっているのか、というようなことを映像を見た後で具体的に指摘し合うことにより、研修者としての教師が自らの授業のあり方を振り返ってみることで、子どもの学習活動に合わせた教師の表現や行動、行為、しぐさなどを学ぶことができる。

授業における子どもの理解

授業の中で、子どもは、どのように学習し、どのように心をひらいていくのだろうか。DVD 映像から子どもの心の状態を想像してみる練習ができる。

子どもが気持ちを集中させ、学習活動に真剣に取り組んでいる表情をみて、そのような表情を生み出すような教師の指導技術を学び合うことが可能である。子どもの集中が途切れそうになる前に、どのような手立てを工夫しているか、子どもが集中するためにどのような学習対象をつくっているのか、そうした内容を考える材料にすることができる。

子どもが真に気持ちを一つにしているときには、思わず頬杖をついたり、頭に手をやったするものである。うれしいときや心の底から満足したときには、思わず飛び跳ねたり、体を動かしたり、手足を動かしたりするものである。そうした子どもの表出というものを授業の中で発見し、その真の意味を理解することが可能である。

教材研究と授業展開の構造、発問の工夫

授業で使用している教材は教科用図書（光村図書小学校一年生「国語」下）に採用され、誰でもいつでも取り組むことが可能なものである（まどみちお作、「ともだち」）。短い日本語の文であり、あえて国語の授業というように構えるのではなく、どのような授業においても共通なものだと考えることが必要である。その上で、この教材をどのように解釈し、どのように授業展開に生かしていくかということについて考えることができる。

映像ではこの教材についてさまざまな解釈をし、授業展開に生かす工夫をしている（詳細は、教材映像、教材テキストを参照）。映像を見る前に、この映像で使用した教材を使用し、どのような解釈が可能なのか、どのような授業展開をつくることができるのか、模擬授業をやってみるということなどが可能である。その上で、映像を見ることにより、授業の難しさ、あるいは、楽しさというものに気づくことができる。

授業の構造と展開

子どもの気持をほぐしたり、授業の世界に子どもを引きつけたりする技術やタイミング（特に、その時間配分）、課題を示したり、指示したりするタイミングなど、授業の展開がすっきりしており、構造が立体的になっていることが分かる授業である。指導案は教師の頭の中に入っており、教師の側の都合というよりは、子どもの学習の展開に併せて、授業展開がつくられていく。こうした授業の構造を理解するための教材として活用することができる。

また、授業における課題（学習の対象）が教師の側から出されるときと、子どものつぶやきが生かされる場合と二通りあること、その両者がうまくかみ合っていくことで、子どもの集中力が高まっていくことが映像から読み取れる。

以上のことを、映像を見た後で検討したり、話し合ったりすることで、授業の構造化や授業課題が創造されること（特に、子どもの反応から生まれること）について、理解することができる。

研究授業の参観と研究協議のあり方

授業を参観する際には、子どもの前で、子どもの表情をみることが大事である。いわば、子どもの前に自分の身をさらすことになるので、はじめは抵抗があるが、そもそも授業というのは、子どもの前に自分の身をさらす行為であると決心し、前から見ることを大事である。映像では参観者が子どもの姿を前から見ていることが分かる。なぜ、前から見る必要があるのかを考えたり、実際にそのようにしてみることにより、授業の展開が今まで以上に鮮明に見えてくることを経験することができる。

研究協議にあたっては、授業の中での具体的な事実をもとに話し合うことが大事である。「授業技術の要素」として析出した事実を参考にして、研究協議のあり方を考えることができる。一般的な授業論を言い合ったり、印象で発言したりするのではなく、子どもを生き生きと学習させ、子どもの集中力を高める指導はどのようなことであるのか、そのために教材をどう解釈するのか、どう発問するのか、子どものどのようなことをほめるのかというようなことを实际的に研修することができる。

・大学・教育委員会連携による研修についての考察

連携を実のあるものにするために

大学が教育委員会と連携しながら教員研修を実施していく場合には、連携の枠組みを作り上げることが必要である。そうしなければ、人事異動等により担当がいなくなってしまうと、実質的な連携がとれないということになりかねない。まずは、協定や覚え書き等を組織として取り交わし、未永く連携していくための枠組みを構築することが必要である。

両者にとってメリットのある関係に

その上でお互いの信頼関係を築くために、大学における教員養成と教育委員会、学校における教員研修とを結合したシステムを作っていくことである。いわばギブアンドテイクの関係を構築することが大学と教育委員会の緊密な連携を進めるための大事な要素であるといえる。

定期的な交流の必要性

実質的な連携を進めるためには、関係者が定期的に会合をもち、お互いにできること、やってみたいことを心を割って話し合っていくことである。

手弁当で

研修の実施にあたっては、会場費や講師謝金等を気にせずにお互いに手弁当でやっていくということが大事である。大学にとっては研修の場に大学生を参加させたり、研修の成果を教員養成の教材として活用するなど、そのメリットは大きなものがあるし、教育委員会にとっても、研修の場に大学教員が積極的に参画することで、教育の実践と理論とを結合させた研修内容をつくることが可能になるし、大学生が参画することは研修する教員にとってもそれ自体が新鮮な感動を与えることになる。

・その他

[キーワード] 教師の技術、教師の表現力、授業展開を支える要素、授業力、教材解釈力

[人数規模] B .

本プログラムにおいては教材映像の開発が研修会よりあとになったため、以下の記述は、本プログラムにおいて開発した教材を使用した場合との齟齬が考えられるが、参考までに示す。以下、研修日数（回数）も同様である。

[研修日数（回数）] B .

【問い合わせ先】

十文字学園女子大学

総務部総務課

〒352-8510 埼玉県新座市管沢2 - 1 - 2 8

TEL 048-477-0557